
もう一度、抱き締めて

にいに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一度、抱き締めて

【Nコード】

N2236B

【作者名】

にいに

【あらすじ】

捨て犬だった俺を優音が拾ってくれた。一緒に過ごせて幸せだった。これからもそんな日々が続いていくと思っていた――。

突然の悲劇

俺は雑種犬。名はスター。随分思いついた名前だな、とかは言わないでほしい。飼い主の優音がくれた名前だ。俺の背中にある黒の斑の形が星に見えることからつけられた。決してテレビなどで活躍している”スター”とは違うのだが、勘違いされそうで、誰かに紹介される度にハラハラしている。

でも、家族はいつしかスーと呼ぶようになったので勘違いされる前に本名を知ってもらえない。

優音は11歳、小学五年生の女の子だ。

俺は6年前、林の木に繋がれ、弱りきつているところを優音に拾われた。

優音は両親の反対を押しきり、俺を飼い始めた。

そのうちお母さんもお父さんも俺を可愛がってくれるようになり、俺は幸せな日々を過ごしていた。これからもそんな日々が続いていくと思っていた。

あれは去年のこと。

優音が病院に運ばれた。

お母さんは泣いていて、お父さんは真っ青な顔しながらお母さんを慰め、病院に行った。

俺はやっぱり犬なわけでお留守番。

心配で、心配で、どうかしてしまいそうだった。

意味もなく遠吠えをしたりした。

帰ってきたお母さんが話してくれた。

優音は野良犬に噛まれて大怪我をしたらしい。大好きな優音が、自分と同じ、犬によって傷つけられた。

——悲しかった。
優音が家に帰ってくるまでの時間が、まるで永遠のように感じられた。

俺は家の中のケージの外で眠ってしまっていた。
すると、

『ガチャガチャ』

玄関の開く音。

「大丈夫?? ゆっくり歩いていいのよ」

「もう平気よー」

優音! 優音だ!

「ワン!!」

優音ー!

優音のいるであろう玄関に俺は走った。

いつもは家の中を走り回るとお母さんに怒られるけど、そんなの気にしてる場合じゃない。

早く、早く優音の元へ———。

すると、包帯を腕に巻いた優音の姿が見えた。

ずっと、ずっと待ちわびた、心配だった優音の姿。

足元に擦り寄ろうとした、その時、優音と目が合った。

途端に優音が悲鳴をあげた。

「やだ! お母さん!!」

そう叫んで、優音はお母さんの後ろに隠れ、震えていた。
愕然とした。

優音に避けられた。

優音が俺に脅えている。

なぜ。

なぜ。

なぜ。

優音、どうして？

この日から、（俺と君の関係は狂ってしまったね。ねえ、君はもう俺と遊んでくれないのかな？もう笑いかけてもくれないのかな？ねえ、もう一度抱き締めてよ。）

突然の悲劇（後書き）

微妙なところで切ってしまいました（汗）不定期連載です。続きもぜひ読んでくださいね。

与えられた、チャンス？（前書き）

評価いただけると嬉しいです。

与えられた、チャンス？

優音は犬恐怖症になった。

【奇跡の始まり】

それから、俺は家の外に追い出されてしまった。冬は寒いし、夏は熱い。でも、優音の側にいけないことが一番苦しかった。あんなに遊んでくれたのに。あんなに好きだって言ってくれたのに。どうしてこんなことに…………。

優音は、それこそ俺を見てパニックになることはなくなったが、近寄ろうとすると脅え、逃げた。

離れたところから、

「スー、ごめんね。」

なんて目に涙を溜めながら言うもんだから俺まで泣きそうになった。それをごまかそうと、俺は

「くうーん…」

と小さな声で鳴いた。

それから一年が経ち、今に至る。

優音は相変わらず犬を怖がった。

でも全く状況が変わらなかったわけではなかった。

犬は犬でも俺には近付けるようになったのだ。まださすがに触ってはくれないが、優音にしたら大進歩だった。やはり以前までの俺らの関係があつてこそだと思う。

お互い小さい頃から一緒に、時には一緒に布団で寝たりもした。本当に仲良しだった。きっとそのおかげだったのだろう。

しばらくはその大進歩に喜び、浮かれていた俺だったが、それから一週間。一ヶ月、二ヶ月と経つても、それ以上俺らの距離は縮まることはなく、結局また落ち込んでしまうのだった。

そんな中、あの日はやってきた。

いつものように外の犬小屋で、俺は眠りに就こうとしていたのだが、なかなか寝つけなくて考え事をすることにした。でも考えることと言ったら優音のことばかり。

（でも俺が焦っても仕方ない。いいじゃないか。まだ時間はある。ゆっくり触ってもらえるようになればいい、）

そんなことを考えているうちに、俺は眠りに落ちた。

俺は夢を見た。

「スーよ、スー。スー。」

誰かが呼んでる??

「スー。」

(……………誰このおっさん。)

俺が目を開くとそこには知らないおっさんがいた。

(まさか泥棒!?)

「わう! わうわう!」

俺はおっさんに向かって吠えた。
するとおっさんは、

「泥棒ではない。周りを見てみる。
と言った。

(周り?)

言われた通りに周りを見回すと、見たこともない、というか、よく
分からない空間に来ていた。真っ暗で、何も見えない。

「わふ…(ここ……、どこ?)」

「この説明は置いとけ。わしは私はお前に伝えることがあった。
来た。」

なぜかこのおっさんには俺の言葉が通じているらしい。
俺は吠えるのをやめた。

「わうー？（伝えたいこと？）」

「そうだ。」

（はて？なんのことだ？）

怪訝な顔でおっさんを見つめていると、

「単刀直入に言う。スー。お前は死ぬ。」

（……………はい？）

「物分かりの悪いやつだな。お前は死ぬ。一週間後にな。」
おっさんの頭を疑いつつ、俺は聞く。

「ううー（俺が死ぬって？何を根拠にそんな。）」

「まあ信じるか信じないかはお前の自由だ。そんでな、もう一つ言わなきゃいかん話があるんだ。こっちはいい話だぞ。」

優音には触ってもらえないままで、しかも一週間後に死ぬなんて言われて…

（この状態でいい話なんて言われてもな…。）

「わん（何？）」

「わしらはな、死を一週間後に控えた者たちの前に現れて…、と言っても、当選者だけだな。」

「くぅ〜? (当選者?)」

「そうだ。当選者だ。一ヶ月に一人、いや、お前の場合は一匹だが、選ばれる。その者の元へ行き、一つだけ願いを聞いてやるのだ。」

「わんわん!?(願い!?)」

「そうだ。今月はお前だ。スー。」

願い。そんなもの、俺には一つしかない。

「わん。わんわんわう〜。(優音を、優音を元通りにして、また触って、抱き締めてほしい…)」

もちろん、これに決まっている。

だがおっさんは困った顔でこう言った。

「いや、それは無理だ。人の気持ちを帰るのはわしらには簡単なことだが契約に違反することになる。」

「きゅう〜ん。(そんなあ…。)」

「そんな顔で見るでない。だがどうしたものか…他に何かないのか? 餌いっぱい食べた〜いとか、」

「わん!! (ない!!)」

「そうか…。ではお前に力を授けよう。それを使い、自分でどうにかするがよい。」

「(わふ?) 力?」

「そうじゃ。ま、諦めず、頑張れよ。そして、忘れるな。タイムリミットは一週間。一週間経てばお前は死ぬ。あ、このことは誰にも言っちゃ駄目だからな。言ったら一週間と言わず、その場で死ぬじゃあな。」

眩しい太陽の光で俺は起きた。

（なんだったんだ？夢？？？）

辺りを見れば、見慣れた自分の家。

（やっぱ…夢？？）

（そうだな。にして変な夢だったなあ。疲れてんのかな？俺。犬なのに。）

「スー。」

（あ、優音の声。）

「おはよう。スー。」

少し離れたところでにこりと微笑む優音。

（夢と思おう。これから長い時間をかけて、優音に触ってもらえるようにしていけばいい。）

とはいえ、この距離感がつらかった。

「おはよう、優音。」

俺はいつものように鳴いた。

(突然与えられた最後の、最期のチャンス。
で、でもどう使えって言うのさおっさん!!!!!!!!!!!!!!)
)

与えられた、チャンス？（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2236b/>

もう一度、抱き締めて

2010年10月20日19時48分発行